

---

# Best Friends

R A N

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Best Friends

### 【Nコード】

N5645U

### 【作者名】

RAN

### 【あらすじ】

ある不思議な能力を持つ家系の少女と、幼馴染の人気アイドルとの恋。  
それに複雑に周りの人々も巻き込まれ、一つの渦になっていく。  
人々の愛は許されるのか、許されないのか。

dノベ転載。

## 【序章】あの日から始まった

あの時　私が高校一年生の、四月の始業式の時は、ちょうど人氣タレントの海堂ケイが突然休業宣言して、学校ではその話題でもちきりだった。

だけど、私　工藤春見は、特に何も興味がなく、他人事として受けとめていた。

だけど、まさか、その海堂ケイと関わることになるなんて、誰がその時考えられただろう。

そして、ヤツが来たのだ。

「ねえねえ、ちょっと聞いてよ！」

春見の中学からの友人、茶色の肩より長いぐらいの髪を、ポニーテールに結った合田恵津子が、ある種の迫力で春見に近寄ってくる。「何？　どうしたの？」

春見は、いつものことであるので、けだるげな態度で、そう聞いた。

「もう！　何！？　その態度は！　今日のヤツは一味も二味も違うビックリニュースなのよ！　ちょっとは真面目な態度で聞いたっていいじゃない！」

これはちゃんと聞かないとマズいな。

恵津子があまりにも真剣な様子なので、春見は姿勢を正した。

「で、そのビックリニュースって何？」

春見が態度を改めたことに気を良くした恵津子は、少し怪しげな

笑みをうかべ、春見の耳元に口を寄せ、内緒話をうちあげた。

「フフフ……。聞いて驚かないで。なんと、あの人気タレントの海堂ケイが、この学校に転校してくるのよ！」

気が急いでいるのか、恵津子は一気に言った。

本人もつたいぶっているつもりなのだろうが、全然じらされていない。

春見は、一瞬言葉を理解できず、恵津子を見つめていた。

そして、やっと小さく一言呟いた。

「ウソ……」

恵津子はその反応に満足しているようで、春見から顔を離すと、嬉しげに言った。

「ウソなんかじゃないわ。叔父が教頭やってるのよ。そこら辺の情報はバツチシよ。あと、もう一人転校してくるみたいよ」

「へえ…それはまたすごいことになったわね。しかも、海堂ケイってあたし達と同じ年よね。……同じクラスになったら嫌だな。めんどくさそう」

春見の言葉を聞いて、恵津子はため息を深々と吐き、こう言った。「なんであんたってそうなのかしら。もうちょっと女の子らしい反応ができないの？　あまりにも淡泊すぎるわ」

「んなこと言ったって、あたしはそうとしか感じないんだからしょうがないじゃない」

「それもそうね」

恵津子もかなりあっさりしたものだと思えなくもないが、その時だった。

「オイ！　席につけ！　チャイムが鳴ったぞ！」

春見達の担任の先生が教室に入ってきた。

「ヤバ！　んじゃね！」

「うん」

恵津子はそう言うと、春見の二つ後ろの席に、あわててついた。「まず今日は、転校生を紹介する。入ってきなさい」

教室がざわつきだす。

だが、春見の胸中は皆よりも穏やかではなかった。

恵津子の言ったことが本当なら、転校生はあの海堂ケイだ。

まさに春見が望まない「面倒くさいこと」になってしまう。

だが、春見の焦りをよそに、教室のドアは開き、恵津子の言ったことが真実だったとわかるのだ。

そう、教室に入ってきたのは、まさにその海堂ケイだったのだ。

そして、次の瞬間には、クラス中のざわめきが最高潮になった。

「こら、静かにしろ！ ……自己紹介をしなさい」

静かになつて、先生がそううながすと、海堂は喋り始めた。

こうなると、皆の口は閉じられ、いよいよ沈黙がおりてくる。

「はじめまして。海堂ケイといいます。これからよろしくお願いします」

女子の歓声があがる。また先生が注意し、それから、諸連絡と共にホームルームを終えた。

ちなみに、海堂は、窓際から三列目の、一番後ろの席になった。

そのすぐ後のことだった。

「すみません」

春見はその声を聞いて、驚いて、勢いよく後ろを振り返った。

そして、そこには予想通りに、海堂ケイがいたのだ。

一体、私に何の用なの？

春見は、怪訝そうな顔で海堂を見返す。

「何？」

とりあえず、どんな人であろうと、必要にかられない限り、対等に話そうとする春見の態度がでている。

「話があるんですけど、いいですか？」

対して、海堂は丁寧な様子ではある。

「すぐ済む話なの？」

「話しだすと長いです」

「なら、放課後に……近くの市立図書館なんか、落ち着いていいんじゃないかな。どう？」

「いいですよ」

「あ、でも、友達も連れてっていいかな？」

「ええ。俺も友人を連れていくんで」

「ん、わかった」

「じゃ、よろしくお願いします」

海堂はそう言うと、教室を出ていった。

春見の席は、廊下側の一番前なので、すぐ側にドアがあるのだ。

それで春見は、もう一人転校生がきていることを思い出した。

そして

もしかしたら、海堂の友人はその人で、だから今出ていったんじゃないかしら。

という結論に至った。

「春見！」

恵津子　と他数名（多数と言ってもいいかもしれない）のクラス的女子が、春見の席へと駆け寄ってくる。

「どづいづことなの！」

怒っているのかそうでないのか、微妙で判断しづらい声でそう言った彼女は、クラスでは結構みんなに好かれている方の、可愛らしい女の子だ。

春見は、普段は向けられない彼女の凄まじい迫力に、少々たじろいだ。

皆、好奇心の具合がそれぞれ違うので、表情も様々だ。

「どういうことと言われましても……あたしにもサツパリでして……」

春見の口調は、自然、弱いものとなる。

だが、次の瞬間。

「あ、恵津子と一緒に来てね」

この一言で、恵津子にも視線が向けられた。

これで、彼女も弁明を手伝わなければならなくなった。恵津子は、密かに春見を恨んだ。

「……まあ、確かに、春見が全く海堂ケイと関わりがなかったんだもの。訳がわからなくて当然よ。どういうことかわかったら、ちゃんと教えるから、とりあえずここは落ち着きましょう」  
こういうことに関しては、恵津子はなかなかうまい。

恵津子のこの言葉に、皆は納得したようだ。

別に、このクラスは海堂ケイフリークというわけではないようである。ただ好奇心がうすぐだけのようだ。

だから、その場は無事におさまった。

そして現在、春見達は海堂ケイと、もう一人の転校生 猫野雷と共に、市立図書館にいた。

そして、海堂からの話に愕然としているところだった。

「……ハ……？」

春見は頭がよく働かず、そう聞き返していた。恵津子はただ黙っている。

海堂は、変わらず真面目に答えた。

「驚くのは無理のないことですが、俺は本気です。俺達は、遠藤夏実さんどうなつみという女の子を探して、あちこちを回ってるんです。で、春見さんがその条件に見事にピッタリくるんです」

「だ、だからって、あたしがその夏実さんとは限らないわけだし……」

「失礼ですが、貴方に十歳以前の記憶はありますか？」

春見が否定的なことを言おうとした時、猫野はそうスパッと切り込んでくるように質問した。

実際、この質問は春見にとって、切り込んでくるように、ではなく、実際に切り込まれていた。

「……それは……ないけど……」

そう、なんと見事なことに、年が同じ、前髪だけが赤色ということだけではなく、記憶がないところまで一緒なのだ。

記憶がないというのは、海堂達の推測にすぎないのだが、なんとなく説得力がないわけでもなかったのだ。

記憶があるなら、何かしらのコンタクトがない訳がないという、彼らの言い分も、理解できる。

これは、本当に何も関係がなければ、鼻で笑えるようなことなのだが、春見は、この時点で既に、海堂達に何かを感じ取ってしまったから、キツパリ否定ができないのだ。

そして、春見のその様子を見て、海堂は笑顔　後から春見が思ったことだが、この笑顔がくせものなのだ。さすが芸能人といったところか　でこう言った。

「とにかく、こっちはなんの手がかりもないんですよ。ある可能性にかけたいんです。じゃ、そういうことで、もう遠慮はしません。」



……これからバシバシいくから。よろしく、春見」

この日から、春見の日常は別のものへと向かいます。

R A N      \* \* \* 2 0 0 5 / 2 / 1 \* \* \*

## 【第一章】ミート・ザ・ストレンジャー

あれから少し日がたち、今は五月のゴールデンウィーク真っ只中。世間は大型の連休を楽しむ者にあふれる、まさに黄金週間である。だが、そんな中、春見は家におり、すごぶる機嫌が悪かった。それは、なぜか。特にどこにもでかける予定がないからではない。今は午後八時。原因は、春見の隣にいる人物。海堂にあった。

「なんであんたがここにいんの。うざいわ。むさいわ。帰って」  
今日何回言ったかわからない台詞を、春見は海堂に言う。  
だんだん事務的な口調になっていて、もう下手な役者の台詞のようである。

そんな台詞に海堂がへこたれるはずもなく、彼はこう返す。  
「大丈夫だよ。春見一人暮らしだし、部屋広いし。どうぞおかまいなく」

こつも態度を切り替えられると、すがすがしいと言えば聞こえは良いが、すがすがしすぎてムカムカしてくるというのが、今の春見の心境だった。

あれから、開き直った海堂はとんでもない奴だった。

学校では、休み時間ごとに春見の所に来て、放課後は放課後で、春見がいるいない、許した許さないに関わらず、普通に春見の住むアパートにいるのだ。

しかも、ゴールデンウィークの今は、泊まり込み決行中である。つまり、二人つきりと言える。

だが、そこら辺は海堂もわきまえているらしく、何事もなく今に至る。

というか、春見がなんとなく海堂にきつく対応できないのも、理由の一つと言えるが。

そして、彼女は、もはやどうしようもないことに気付き、あきらめの境地である。

だから、この台詞も形式的なものとなるのだ。

「ところで、あんたはなんか用とかないの？」

テレビも退屈、本を読むにも退屈なので、春見は海堂に話し掛けることにした。

「俺？ 俺は別ないよ。だいたい目的はあるし」

言われてみればそうだ。自分の馬鹿さ加減に、春見はなんだか疲れを覚えた。

「あたし、先に寝ます。あんたも早く寝なさいよ。おやすみ」

春見はそう言うと、テーブルの側から立ち上がった。

その春見に、海堂は言う。

「嬉しいな。心配してくれてるんだ」

海堂の軽い調子のこの言葉に、春見は一瞬膝の力が抜け、転びそうになるが、なんとか踏み止まり、こう言い返した。

「自分が寝ている時に、誰かに部屋にいられるのって落ち着かないのよ。だいたいここには……」

春見はここで言葉を止める。

春見の様子の変化に気付いた海堂は、すぐに声を掛ける。

「ここには？」

可能性は塵一つ見逃さない。そういう姿勢が見て取れる。目の霧困気まで違っている。

しまった。

春見は心の中で舌打ちをした。

さてどう言い訳しようか。それとも？

春見は、自分が何をしたいのかわからなくなった。

なぜ、海堂の邪魔をする必要がある？

その夏実という人物じゃないなら、それはそれで前の生活に戻るだけ。

夏実という人物なのというなら、その時に戻る。

どちらにしる帰る。自分の場所へ。

では、何が引っ掛かっている？

「春見？」

春見が空を見たままなので、海堂は春見に声をかけた。

春見はハッと気付き、海堂を見る。

わからなかった。

春見には、自分が何をしたいのかわからなかった。

けれど、したいようにすれば、後悔だけはないと思うから。

春見はそうして今まで生きてきた。

「ゴメン。ボートとしてた。……あのさ、あたし、あんたに話してないことがあるの」

春見は、今のところは、他に二人しか知らない秘密を話すことにした。

「これが、なんでだか知らないけど、あたしの側に居てくれてるレイっていう……霊なの？」

春見は、隣に立っている、少し体が透けている、髪を持つべき色を失ったような色の、腰まで流している長い髪の青年に、最後は問

い掛けていた。

レイという名の青年は、どこを見ているでもない遠い視線を春見に向け、静かな、低い声で答えを返した。

「まあ、そのようなものだ」

「じゃあ、あなたなら春見の昔を知っているんじゃないですか？」

海堂がレイに聞く。一応丁寧語を使っているようだが、あまり尊敬の念は見えない。ただの道具としての言葉のようである。

「残念だが、私は教えられない。他の方法を探してくれ。すまないな、海堂ケイ」

レイの口調は、あまりすまなさそうに聞こえない。

レイの飾らない言葉はいつものことだが、今回は違うように春見は感じた。

親しげな、でも嫌悪しているような。

「レイは海堂を知っているの？」

春見は感じた疑問を口に乗せる。

その言葉に、レイは一瞬感情が揺れたように見えた。

だが、ここで口を挟んだのは、意外にも海堂だった。

「俺は少なくとも知らないな。ま、とりあえず今は、別にそんなこと気にしなくていいんじゃないかな。……さて、俺は寝るよ。おやすみ」

そう言うと海堂は、側にあつた毛布を自分の上にかけて、そのまま横になった。

なんとなくはぐらかされたような気がするが、海堂がそうした方が良く判断したのだから、あまり気にしないことにしよう。

春見も、自分の部屋に入り、寝ることにした。

レイは、居間であぐらをかき、そこにじっとしていた。

春見は居間にいた。

目の前には海堂がいる。

二人は向かい合って座っていた。

「春見、悪いけど、俺もう我慢できない」

「え、ちょ……」

海堂の顔が、どんどん春見に近付いていく。

唇に息がかかる。

触れ合いそうになった、時。

「！」

春見は、ベッドからガバリと起き上がり、辺りをキョロキョロ見回した。

海堂は、ベッドの向かい側のソファで寝ていた。

「……夢……か」

春見は、ただ言葉を小さく口から出した。そして、再び眠ろうと、ベッドへ身を沈めた。

「……………眠れない」

春見は、今度はゆっくり起き上がる。

ベッドから出、春見は冷蔵庫のある台所へ向かった。

春の陽気は、暖かいを通り越して、たまに夏のような暑さを体にもたらず。

春見は、冷たい飲み物を飲めば、楽になるのではないかと思ったのだ。

ふと海堂が気になった春見は、その顔をのぞきこんだ。

すると、海堂は目をパツチリと開け、春見の手を掴み、自分に引き寄せ、春見の肩を押し、床に倒れる格好になった。

なつてしまった。

「あ……」

春見は言葉がだせない。体を動かすこともできない。

春見の胸は、何かわからない色々な思いで一杯だった。

「春見、悪いけど、俺も男なんだ」

海堂はそう言うと、春見の唇に、自分の唇を重ねようとする。

「っ！」

春見はまたもベッドから起き上がった。

まず自分の周りの物を触り、自分の体を触った。

そして、視線を自分の周りへと動かすと。

海堂が窓際に座って、外をぼんやり見ていた。

春見は夢と現実になんか混乱してしまい、そこを動けずにいた。

すると、海堂が春見が起きていることに気づいた。

「あれ、春見……起こしちゃった？」

春見はそれで我にかえり、激しく首を振った。少し目が回るぐらいいい。

「え、あ、いや、ちょっと目が覚めちゃっただけよ。なんか暑くて

……冷たいものでも飲もうかな……」

春見は、気まずさをごまかすために、冷蔵庫に向かった。

そこからミネラルウォーターを取り、キャップを開けて飲んだ。

その間、海堂は、春見をじっと見ていた。

「ねえ、春見ってさあ……」

海堂がそう口を開いたので、春見は飲むのをやめ、水を口に含んだまま、返事をする。

「ん？」

そして、口の中の水を飲もうとした時。

「キレイだよね」

ング！

春見は変な風に水を飲み込んでしまい、激しく咳き込んだ。のどがツーンと痛くなった。

「な、何を、あ、あんたは、いきなり、言い出すの」

春見は、動揺と喉の痛みでうまく言葉をだせないでいる。

だが、海堂は、実に冷静に言ってくれた。

「俺は、春見は夏実だと思ってるんだ。なんか、そんな気がしてならないんだ。今までそれらしい人に会ってきたけど、こんなにビシツとくる人なんていなかった」

海堂が、じつと春見を見つめる。

「……あんたがそう思うなら、そうなのかもね」

春見は、軽い調子でそう言った。

「エ……」

海堂は驚いて、春見をさっきとは違う意味で見つめる。

「だって、あたしは記憶がないからわかんないから、なんとも言いようがないもの。あんたが思うことを否定する権利もないし。ただ、あたしははっきりしないのが嫌だから、あんたに協力してあげてるのよ。……それに……」

春見は冷蔵庫のドアを閉めて、海堂に微笑む。

「あたし、あんたが思ってるほど、あんたのこと嫌いじゃないわよ」  
春見の言葉を受け、海堂も微笑み返した。



R  
A  
N

\*  
\*  
\*  
2  
0  
0  
5  
/  
2  
/  
1  
\*  
\*  
\*

## 【第二章】心を開いて

翌日の朝。

まだゴールデンウイーク真っ最中なため、春見は、窓からの光が強くなった時に目が覚めた。

時計を見ると、九時をさしていた。

居間に行くと、海堂はすでに起きていて、朝食までしっかり準備されていた。

彼は家事の類がとてもうまく、春見の芸能人像 荒んだ私生活をしているという、やや偏見のものを 百八十度変えてくれた。

だが、トーストやスープ達は、冷めているので、温める必要がありそうだ。

もちろん、海堂はもう朝食を終えていた。

「……ああ、海堂、ゴメン。寝坊しちゃって……」

「ああ、別に気にしないでいいよ。んじゃ、温めてくるね」

海堂が朝食達を持って立ち上がった。

なんとなく嬉しそうに見えるのは、春見の気のせいだろうか。

それは置いといて、まず春見は、その間に顔を洗おうと、洗面所に行った。

その時 ピンポーン。

玄関のインターホンが鳴った。

春見は、玄関へと向かう。チェーンを下ろし、ドアを開けた。

「ヨオ！ 春見」

「春見、元気？」

「こんにちは」

そこにいる、にこやかな三人を見て春見は ドアを素早く閉めた。

「うわ、待て！ オイ、アイツ、ドア閉めやがった！ カギまでかけてやがる！ オイ！ 春見、開けるっつもの！」

春見はゆっくりと、再びドアを開けた。

「うるさいわね。近所迷惑よ。一体なんだったの」

「なんだったことはないだろ。あれだけ可愛がってやったのに……」

「あたしが、敬介さんに海棠君のこと話したらこうなったのよ」

敬介 フルネームは伊藤敬介で、春見の現両親の隣に住んでいた、幼なじみ がさらに何か言おうとした時、恵津子がさらりと事情説明してくれた。

彼女は、変な所で合理主義なのだ。

だが、今の春見にとっては、友人のその性格は、嫌なものでしかなかった。

「あんだ、また余計なことを……」

「何が余計なことか！ 春見は何も言わなさ過ぎなんだって！ さて、説明もしたことだし、さっそくお宅拜見」

「あ！ ちょっと待ちなさいよ！」

春見の制止を聞かず、皆は普通に入っていく。

だが一人だけ、挨拶以降何も言わない人物を見て、春見は彼猫野の腕をつかんだ。

「なんであなたが来るの？」

「いや、なりゆきというか、なんというか……」

とても納得できそうな言い分ではあるが、なんとなく、春見は彼を信用できなかった。春見はじつと猫野を見る。

さすが海堂の友人と言うべきか　海堂が芸能界にいた時は、マネージャーみたいなこともしていたらしい　表情は変わらない。  
結局は、春見の方がどうでもよくなり、春見は猫野の腕を離れた。

「まあ、汚い所ですが、どうぞ」

猫野はおかしそうな笑みをつかべた。

「じゃあ、お邪魔しますね」

「ところで、あんたも、髪の色変ね」

猫野が入ろうとした時に、春見がそう言う。

猫野の髪は、根元の色が薄く、こげ茶色のグラデーションになっている。  
「ええ、そうですね。ちなみに自毛ですよ」

「……いや、別にそれはどーでもいいんだけど……そう、ま、いいわ」

あたし、最近なんかやたら気にしすぎよね。

春見達が入った時は、今度は海堂が敬介に捕まっていた。

だが、そこは持ち前の順応性で、見事に敬介と会話なんかしてくれていたりした。

「あ、春見、雷」

その場にいた皆が、春見と猫野の方を向いた。

すると、敬介がさわやかな笑みをうかべ、春見に言った。

「なあ、春見、今日泊まっついていい？」

「あ、じゃあ僕も」

敬介に便乗するように、雷が言う。

「ちよつと待つてよ。こんな狭いトコにそんなに入れる訳ないじゃない」

問題はそこではないような気がしなくてもないのだが、春見はまず素早くそう言った。

「ちなみに、あたしはすぐ帰るわよ」

そこに恵津子のこんな言葉が入る。

「んなこと聞いてないわよ」

恵津子のボケに、春見が見事に、そして厳しくツツコミをいれてくれた。

「大丈夫よ。敬介さんぐらいなら追加してもいいんじゃない？」

恵津子が、今度は意見を出した。

「だって猫野君が……」

変なところで平等を強調する春見だ。

「それなら、『アレ』やればいいわよね」

恵津子が猫野に視線を送る。猫野が、得たりとうなずいた。

「そうですね」

と言うが早いか、猫野の体が急速に変化していく。

変化していったその形は　シャム猫だった。毛色が彼の髪の色と同じだ。

春見は、開いた口がふさがらない。だが、こういう異常なことに免疫がないわけではない。すぐに落ち着きを取り戻し、こう言った。

「なんで、恵津子、猫野君とそんなに仲よくなってるの？」

恵津子は一つの曇りもない笑顔で、

「まあ、そこは色々」

と言った。

何がどう色々なのよ。

春見は聞きたい気もしたが、別に今聞くことでもないと思い、やめた。

「……………それなら、大丈夫じゃないかしら」

春見はため息をつき、だんだん、自分が変なことに慣れていくことをなんとなく寂しく思いつつも、防げずにいる自分もいて、春見は変な気分陥っていた。

「だけど、何で春見はおじさんやおばさんに話聞きにいたりしないんだ？」

とりあえず落ち着いた時に、敬介が、春見に問う。

海堂と猫野は、用があると、外出している。敬介と春見の二人きりだ。

「なんでって言われても、こんな厄介なこと説明して、どうなの？  
ってあんたは聞ける？」

「やろうと思えばできないことないさ」

「要するにやれって言うてるのね」

「ま、そゆこと。向こうさん、待たされてかわいそうだろ。っていうか、お前が好きか嫌いかわハッキリしないのもダメだよな」

「別にあたしは……………」

「どうも思っていないことはないんだろ？」

「……………じゃあ、明日にでも家に帰って聞いてくるわ。それでいいでしょ」

「うむ、良い心がけだ。話が一段落ついたところで、春見、先に風呂入ってこい。俺は今日は早く寝たい」

「写真撮りに行くの？ それならあんた先に入れば？」

春見が、そう提案する。

「いや、ちよつと考えたいことがあってね。だから、その間にお前入って来い。後に人がいない方が落ち着くし」

「ふくん、そう？ じゃあ、お言葉に甘えて、先に入ってくるわ」  
そうして、春見はバスルームに向かった。

その後ろ姿を、敬介は、いたずらが成功した時の子供のような笑顔で見送った。

「ただいま」

それから少しの後、海堂達が帰ってきた。雷はもちろん猫の姿のままだ。

彼らの表情は、あまり明るくない。

敬介は、少し気になったものの、こう言った。

「海堂君、なんだか疲れているようだけど、風呂に水はってきてくれないかな？ 春見が部屋にこもっちゃってね」

「はい。わかりました」

ここで「何で俺が」と思わないのが海堂の良い所、もといお人よしなところだ。

敬介はそう思いながら、成功しつつあるイタズラに心踊らせていた。

その頃、春見は浴槽に浸かって、最近起こっている様々な出来事を、どう両親に説明しようか考えていた。

と、その時だった。

ドアが開く音が聞こえ、誰かが入ってくる気配がした。

そして、バスルーム直結のドアが開いた。

「……………」

「……………」

数瞬の沈黙。

春見の目の前にいるのは、海堂。海堂の目の前にいるのは、春見。

「は、春見！ え？ あ、ゴメンっ！」

海堂がやっと我に返り、慌てて出ていく。

「敬介さん！」と言う声が、少し遠くで聞こえた。

これで春見は、敬介のしわざだということを理解できた。

言ってみようか、海堂には死角で、見られてはいけない所は見えて

だが、本人はこの時点で全く冷静ではない と、しばらく湯槽

に浸かってから、春見はバスルームを出た。

とりあえず、海堂には死角で、見られてはいけない所は見えて  
いないだろう………と思いたい………。

っていうか、問題はそういうのじゃないのよ。

そう考えたから、春見の言うことは一つだった。

春見が今に戻ると、海堂は所在なさに視線を下の方に向けた。

一方、この原因であるはずの敬介は、ニコニコと笑っている。

これが、本当に無邪気な子供のように見えるからクセモノだ。



「あ、春見、さつきは……」

海堂が、とりあえず何か言わなければと、声を出すが、

「大丈夫。わかってるから」

春見が、素早くフオローすると、海堂はホツとしたのか、それ以上言葉を続けなかった。

春見が、敬介を上から睨み付ける。

「なんでこんなこと企んだの」

敬介は相変わらずのニコニコ笑顔のままだ。

「ヤダア、春見ちゃんたらコワイイ」

全然そんなこと微塵も感じさせない笑顔で、彼はそう言った。これには、さすがの春見もブチ切れた。

「あんたねえ！」

春見が敬介の襟首をガシツと掴んだ。

海堂が、止めに入ろうと立ち上がったところで、敬介は、冷たく冴えた笑顔に、表情を切り替えた。

その冷たく射る目で、春見を見る。

その場の全員が、一瞬凍り付く。

こういう敬介の表情は、どのような場合においても恐ろしい。

「俺、さつき言ったよね。春見がハッキリしないから悪いんだって。どうさ。わかんない？」

敬介の言葉は、いちいち回りくどいから嫌だ。

春見は、心の底からそう思った。

「わかる訳ないでしょ！！ このキツネ男が……！！」

そして、めいっばい、襟首を掴んだ手を前後に揺らした。

これにはさすがの敬介も参ったようだ。

この件のせいで春見は、海堂への気持ちを考えると、宿題が増えてしまった。

なぜなら、先日の夢といい、海堂には、鼓動数の増量により、心臓の寿命を縮められっぱなしだからだ。

実は、最初からそうだった。

だから、春見はその気持ちに決着をつけなければならなかった。

RAN

\*\*\*2005/2/1\*\*\*

### 【第三章】GIRL GIRL

翌日、昨日よりは早く目覚めて、春見は朝食を作っていた。敬介は、仕事があるというのは嘘ではなかったらしく、今朝早々に出ていった。

春見はこれのせいで起きたのだ。

ちなみに、海堂と猫野はバツチリ起きていて、朝食ができるのを待っている。

猫野は、猫の姿だから、キャットフードでもあげたい気分だが、それはかわいそうなので、こちらもしっかりしたものを作った。果たして、どのようにたいたらいいのか興味深いところだ。そして、朝食ができ、皆でいざ食べようとした時だった。

ピンポーン。

玄関のインターホンが鳴った。

こんな朝早くに　でも、普通の人間は活動しててもおかしくない時間　誰だろうと、春見は手をつけ損ねた朝食を後に、玄関へと向かう。

ちなみに、海堂達はちゃっかり朝食にありついていていた。

春見が玄関のドアを開けると、そこには　黒い翼を背中にはやした、にこやかに笑う同い年ぐらいの、どこかで見たことのあるような顔をした少女がいた。

彼女は、その翼だけではなく、わざとらしいくらい、黒しかない人だった。

髪や目は黒いし、服も暗い色の物ばかりだった。

だけど、肌は眩しいくらい白くて、黒を一層ひきたてていた。

だが、黒い翼が見えたのは一瞬で、次の瞬間には、羽がブレて、見えなくなっていた。

春見がキョトンとして、少女を見ていると、少女は、どこかで聞いたことのあるような声で話した。

「おはようございます。昨日から隣に越してきた長原涼貴です。これ、つまらない物ですが……」

少女　涼貴はそう言っていると、春見に、きちんと包装された底の浅い長方形の箱　たぶん菓子か何かだろう　を差し出した。

「ああ、すみません。そんなお気遣いしてもらって……」

春見は、そう言って、ありがたく受け取った。貰える物は貰ったが、春見のモットーの一つである。

この時の春見の頭の中では、先程の黒い翼のことはどうでもいいことになっていた。

「いえ、これからお世話になるかもしれないんですから、これくらい当たり前ですよ」

涼貴がそう答えたと同時に、第三者の声が割って入った。

「涼貴！　何でお前がココに！」

海堂だった。

しかも、すこぶる機嫌が悪そうだ。むしろ、怒っているようにも見える。

嘲るような、威嚇するような、そういう表情をした。

「ああ、ケイか。弱虫のお前の方こそ、何のつもりでいるんだ？　贖罪のつもりか？」

「なんだとっ……!!」

口調まで先ほどと違う。

海堂は、怒りに顔を染めた。

春見は、何が何だか全くわからなかった。

ただ、二人が知り合いだということぐらいしかわからない。

そんな春見に、涼貴が気付いたようで、今までの複雑な笑みに、慈しみをあわせたような表情になり、さらに何か言おうとする海堂の言葉を遮った。

「まあ、『春見ちゃん』が困ってるようだから、この辺にしようか。……じゃあ、これで」

最後は春見に向けた言葉で、そのまま彼女は隣の自分の部屋に帰っていった。

「ねえ、一体どういうことなの？」

春見は海堂の方を向き、そう言った。

海堂、春見、人の姿に戻った猫野は、居間に黙って座っている。

「長原さんは、一体何者なの？」

春見は再び問う。

問わなければ、永遠に話そうとしないような、そんな感じだったからだ。

海堂は、言われてしまったては話さなければならぬ、という感じで、渋々ながら話し始めた。

「……………涼貴は、夏実の双子の姉なんだ。夏実の家は代々不思議な能力を使って、奉仕活動したりしている家で、だけど、歴史が長いせいか、みんなが変なエリート意識を持ってて、涼貴はそんな中で能力がなかったものだから、家族に疎まれてた。そんなんだから、アイツは、能力があつて、みんなに可愛がられてる夏実に劣等感を抱いてたんだ。そして、アイツの養子縁組が決まって、そのせいで、夏実は……………俺がもう少し……………」

海堂が、苦しくものを吐き出すようにそう言う。

その様子があまりにも痛々しかったので、春見はそこで言葉を遮ることにした。

「もう、いいわ。ありがとう。あとは、もしあたしが夏実さんなら、思い出せばいいことだし」

「でも……」

「いいの」

春見は、強く言い切った。

なんとなく、海堂にこれ以上話させてはならないような気がしたからだ。

それと、彼が涼貴に敵意だけを抱いているわけではないということとがわかって、なんとなく嬉しくなったから。

何があったかはわからないが、とても嫌なことがあったのに、相手を思いやる言葉を言える、そんな優しい彼を、これ以上傷つけるのは不条理なような気がしたのだ。

それから春見は、両親の所に行き、今までの事情を説明をして、話を聞いた。

自分が本当に両親の子供なのか、と。

すると、両親はできれば話したくはなかった、と、真実を語り始めた。

それで、春見は、近くの川にいたのを拾われたことがわかった。

かなり冷たくなっていたので、急いで病院に運んだそうだ。

そして、警察に連絡をしたものの、身元が判明するまでには時間がかかるため、施設にいられるよりは、自分達で育てた方がいいだろうと、子供のなかった二人が、もし子供が生まれれば名づけようとしていた、「春見」という名をつけ、引き取ることにしたのだ。そこから、春見の生活が始まった。

ちょうど、その夫婦に子供がいなかったのも、幸運だったのかも

しれない。

悲しげな瞳を向ける両親　　今となつては義理だが　　に、春見は、

「今のあたしには、父さん母さんがあたしの両親よ。それ以外ないわ」

と言った。

二人は、静かに目を閉じ、無言でうなずいた。

翌日の今日は、学校だ。

今は、ホームルームが終了している時間だった。

本来なら、友人達とのたわいのない会話をする時間なのだが、今日の春見達は、少々違っていた。

春見達の隣のクラス　　猫野と同じクラス　　に、転校生がきたのだ。

それは、なんと涼貴だった。

春見は、一度涼貴と話してみたかったので、昼休みに、隣の教室へと向かった。

海堂達に見つかり、何かと厄介なので、春見が隣の教室に向かうと教室を出た時に、涼貴が出てきたのはちょうどよかった。

「長原さん」

春見が、涼貴を呼び止めた。

涼貴は、それに気付いて振り返った。

「長原さん、ちょっとお話ししたいんだけど、いい？」

涼貴は、春見をじっと見た。

この前のような、優しさのにじむ表情はなく、厳しく春見を見据えていた。

春見は、首筋に寒気を感じたが、気にせず言葉を発した。

「昨日、海堂からあなたのことを少し聞いたの。だめかしら……？」

涼貴は、表情をそのままに、

「ああ、いいよ。ちょうどお昼休みだから、裏庭で一緒に弁当を食べようか」

春見の親しげな雰囲気につられたのか、涼貴も地の言葉で喋った。

春見は、なんとなく嬉しくなり、自分も共に昼食をとるつもりだったので、裏庭に向かった。

そして、涼貴と春見の二人は、裏庭で昼食をとっている。

「……………」

「……………」

沈黙ばかりが続いていた。

春見は、はたしてなんと話し掛けようか大いに悩んでいたが、そんなところに、天の助け（？）が舞い降りた。

「春見ちゃんは、本当に記憶が何も無いのか？」

涼貴が話し掛けてきたのだ。

春見は少々焦ったが、とりあえず思ったことを口にした。

「うん。だから、あたしがホントにその夏実さんかわかんないし、もし夏実さんだったとしても、どうすればいいかわかんない、のよ……………」

なんとなく気まずくて、歯切れの良くない春見の言葉を、涼貴はじっと聞いていた。



そして、言葉が切れた時に、自分の言葉をはさむ。

「私が思い出させてあげようか？」

春見の肩に手をかけ、鋭い刃のような微笑みで、春見の顔を覗き込んだ。

彼女の背中に、黒い翼が見えた。だが、すぐにブレて見えなくなつた。

二回目。やはりあれは錯覚じゃなかったんだ。

そして、春見の心臓が、早く鼓動しだす。体が硬直する。嫌な感じだ。

でも、聞かずにはいられなかった。

「どつやって……？」

口が乾いていくような感覚に囚われて、言葉が少し不明瞭だった。

だが、涼貴にはしっかりと聞こえていて、鋭い刃の笑みを、柔らかいものに変え、春見の耳元に唇を寄せ、囁いた。

重く、そこに確かに存在しようとする、意志をもった声で。

「『お前なんか、いらない』」

瞬間、春見の体に衝撃が走った。

頭の中にあらゆる音声や映像が、洪水のように溢れては流れていき、混乱を生んだ。

気付いた時には、春見はなりふり構わずに走りだしていた。

どこへ向かうか、わからずに。

涼貴は、その春見の後ろ姿を、悲しげに見つめていた。

R  
A  
N

\*  
\*  
\*  
2  
0  
0  
5  
/  
2  
/  
1  
\*  
\*  
\*

#### 【第四章】 ANYTHING

海堂達が、春見の不在に気付いたのは、授業が始まる直前だった。いないのはわかっていたが、すぐに戻ってくるだろうと思ったのだ。

あまり干渉し過ぎるのも良くない。

そう思って、何も気にしなかったのに。

だが、こうなると、後悔だけが海堂の心を支配した。

授業も、全然耳に入らない。

授業が終了すると、海堂は涼貴の所に行った。

春見は未だ帰らない。

もう、アイツの所に行くしかない。

海堂は、隣の教室に向かった。

「涼貴！！」

その頃、春見は、実家の近くの、あの拾われた川辺にいた。

雨がしとしとと降り、春見の服や髪を少しずつ湿らせていく。

川辺にいる時はいつも一人だ。

いや、一人になる時に、川辺にいるのか。

一人になると、色々なことを考える。

春見は、思い出した記憶を、忘れたり、なくしたり、ありすぎて混乱しないように、じつくりと頭の中で思い出していた。

それは、涼貴が養子に行く前日に起こったことだった。  
当時、春見　夏実は十二歳だった。

普段から夏実に抱いていた劣等感と、両親に疎まれていた悲しみが、この時爆発したんじゃないかと、春見は今なら思う。

その時の夏実は、ただただ驚いていたのだから、そんな風に考えられることはできなかった。

一方海堂は、それはわかっているけど、自分の、誰も救えなかった非力さを嘆き、反対に、それを気付かせた原因である涼貴を憎む気持ちがあり、素直になれないのではないかと、そう思うのだ。

あの時涼貴は、寝ている夏実を無理矢理起こして、嵐吹き荒ぶ中、川の方へと手を引っ張って連れていった。

夏実は、涼貴が恐くて「どこに行くの」と、聞くことができなかった。  
なっていた。

そして、雨のせいで水量が増している川辺に着いた時、

「涼貴!!!」

なぜかはわからないが、海堂が涼貴に大声で呼びかけていた。  
もしかしたら、彼はこうなることが、予想できていたのかもしれない。

涼貴と夏実は後ろを振り返り、海堂に視線をあわせる。

涼貴の方は、鋭く射るような目付きだった。

「ケイか。どうした?」

そして、軽い言葉とは逆の、存在感を示す、重みのある声でその言葉を発した。

海堂は、気圧されそうになるが、言いたいことはとりあえず言った。  
た。

「どうしたじゃない!　春見をどうしようって言うんだ!??」

涼貴は、口元に薄い笑みを浮かべた。それは仮面のようで、不

気味だった。

だが、目は獲物を見据えるような視線で、海堂に言った。

「うるさい」

海堂は、その場に固まってしまった。

海堂が子供だったからかもしれないが、その時の彼女の目は、大人にだって寒気を覚えさせるような目をしていただろう。

ただ、大人は本能を認めないだけだ。

誰がこの時の海堂を責められようか。

涼貴は、海堂のその様子を見て、表情をなくし、夏実の方を向いた。

その時の彼女の背中に、黒い翼が見えたような気がして、夏実はビクツと肩を震わせた。

涼貴はそれを気にした様子はなく、夏実の両肩に手を置き、優しく、低く囁いた。

「お前なんかいなくなってしまう。お前なんか、いらない」

「涼貴っ！！」

海堂が涼貴の不穏さに気付いて、駆けてきた。

涼貴は小さく「もう遅い」と呟くと、夏実を力をこめて、その瞬間を刻み付けるかのように、押した。

「夏実

！！」

海堂の絶叫が、辺りに響き渡った。

夏実が川に落とされた瞬間、今度ははっきりと、黒い翼が、確かな存在感を持って、夏実には見えていた。

後、水に入る音が聞こえ、水の流動する音だけが、夏実の聴覚を

支配し、あとは、大量の水を飲み込んでしまい、気を失って、何も覚えていない。

何の幸運か、気付いたら、今の春見の両親が、夏実を抱いて、病院に行こうとしているところだった。

それから夏実は春見になったのだ。

夏実の記憶がないまま。

そして今、春見は記憶を取り戻した。

何をすべきかはわかつている。

だが、一気に色々なことを思い出した際のショックは、生易しいものではない。

それによる疲労感に、春見はそこを動けないでいた。

いや、本当は。

「春見！」

その時だった。海堂の声が聞こえたのは。

ああ、やっぱり私は待ってたんだ。誰かに迎えにきてもらうことを。

春見、いや、夏実は、そう強く認識していた。

ちょうどその時、雨がやみ、空からは光の筋がいくつも見えていた。

RAN

\*\*\*2005/2/1\*\*\*

## 【第五章】 THE ONE

この時から約三時間前のこと。

「涼貴！！」

海堂が怒りに顔を染め、涼貴の教室にやって来た。

そして、窓際の一番前の、涼貴の席へゆっくりと近寄る。こつでもしないと、自分を落ち着かせられないのだろう。

クラスの人々は、何かと気になるようで、教室は静まり返った。

涼貴は、読んでいた本から顔を上げると、

「なんだ、ケイか。どうした？」

と、何事もないように聞き返した。

これにケイは、せつかく落ち着こうとしたのも無駄になり、机を、ガンと大きな音がでるぐらい、一発たたいた。

「ふざけるな！ 春見が昼休みから教室にいないんだ！ お前が何かしたんじゃないのか？！」

「まあ、したと言えばそうだが……ケイ、お前落ち着きがなさすぎだ。詳細な根拠がでていない。だいたい、そんな状態で探しに行つて、ちゃんと見つけれれると思つていいのか？ 弱虫ケイが」

海堂は、再び机をたたいた。今度は、さつきよりも強く。

「あの時の俺だと思つな」

そう言つと、海堂は教室から出ていこうとする。

きつと、彼はこれから春見を探しに行くのだろう。

「ケイ」

今にも教室を出て行くところとする海堂に、猫野が声をかける。そして、海堂が猫野の方を振り向いた時、猫野は何か黒い物を放り投げた。

海堂は、それが当たり前であるように、黒い物　黒い麻のジャケットと、黒いキャップを受け取った。

これは、彼が休業中とはいえ、有名人であるには変わりがないので、海堂ケイだとわからないようにする、いわゆる変装道具だ。

「サンキュ」

短く、淡々と海堂は猫野にそう言つと、教室を出て行った。

「雷」

その海堂を見送りながら、涼貴は猫野の名を呼んだ。

「なんだ」

斜め右後ろに二番目の席の猫野も、あっちの方向を向いて、ぶっきらぼうに答える。

「私達は待つていなければならぬ。わかるだろ？」

優しく、言い聞かせるように涼貴は言った。

猫野は、無言で立ち上がった。

涼貴は、それで猫野の方を向く。

「どこに行くんだ？」

「ケイのことだから、誰にも行くこと言っていないだろう。だから、合田さんに言つてこようと思つてね」

猫野は、それで、暗に了解したと告げているのだろう。かなり渋々と言つた感じだが。

「合田さん？……ああ、あのお前の昔の彼女に似てる娘のことか」「涼貴！」



最後の涼貴の言葉に、猫野は顔をほのかに赤くして、咎める声を発した。

「なんだ。気にしているのか。私はまた、懲りずにやっているのかと思ったよ」

涼貴が、全然気にした様子もなく、そう言った。

「……お前つて、ホント、ムカツク奴だな」

猫野はため息を吐きながら、隣の教室へと向かった。

なぜなら、クラスの皆が、二人の会話に聞き耳をたてているからだった。

涼貴は無視して、本を再び広げ、読み始めた。

だが、猫野は教室の入り口でふいに立ち止まり、携帯電話を取り出し、どこかへと電話をかけ、春見がいなくなったことを告げた。

電話を切ると、猫野は、すぐにかき消えるような声で呟いた。

「仕返しくらいは、許されるでしょう」

後に、この猫野の行動が、涼貴の人生において、大変な騒動を巻き起こすのだが、涼貴はもちろん、猫野さえも、その時はそれを知る由もなかったのだ。

それから、学校が終了し、涼貴は自宅に戻り、着替えると、アパートの入り口の所に立っていた。

夏実を出迎えるためだ。

彼女は、先刻自分で言ったことを実行しているのだ。

だが、いつからか雨が降りだし、涼貴の髪や顔や服などを、容赦なく濡らしていく。

そういう時だった。

「何してんの？」

## 【第六章】 A new day has come

ふと、涼貴に話し掛けて、涼貴に傘を差し出す人の気配がして、涼貴はその方向に視線を向けた。

そこには、敬介がいた。

猫野が電話した人物というのが敬介で、彼も、夏実が帰ってくるまでアパートで粘ろうとやって来たのだ。

さすがに、涼貴のように、雨に濡れてまで、などという心構えではもちろんないが。

だが、涼貴はそんなことは知らないし、敬介という人物のことさえ知らない。

だから、話し掛けてきた敬介を不審な目で見ても、しょうがないだろう。

「……誰だ？」

相手が親しげに話しかけてくるので、涼貴も敬語を使う気は毛頭ない。

変なところで、この姉妹は似ている。

それを敬介は感じ取ったのか、優しいな笑みを口になじませながら、猫野から聞いていた情報を口にした。

「俺は伊藤敬介っていうんだ。春見がこっち来てから、何かと一緒に関わってるヤツだよ。君が春見の双子の姉の長原涼貴さん、かな？」

涼貴は、ゆっくりとうなずいた。

一気に色々言われて困惑しているようだ。

敬介も、それはわかっていているようで、ニッコリ笑ってこう言った。

「これから色々あるだろうけど、ヨロシク！」

「春見！」

海堂が、夏実へと駆け寄ってくる。  
土手を走っている時は、足がもつれて転びそうになっていた。  
そして、夏実を抱き締める。

「……………」

しばらく、二人はそのままだった。  
だが、やがて夏実が口を開いた。

「海堂……じゃなくて……ケイ、あたし記憶が戻ったわ」

まだ慣れないようで、照れ臭そうに、夏実はそう言った。

海堂は、夏実から少し体を離し、夏実を見つめた。

そして、微笑みながら、彼女の髪に触れ、言った。

「……………帰ろうか……………夏実。みんなが待ってる」

夏実は海堂の言葉が嬉しくて、微笑み返して言った。

「帰ろう」

「涼貴ちゃんは、今も春見が嫌いなの？」

一方、敬介と涼貴の方は　敬介が話題をふって、色々なことを話していた（涼貴が答えさせられてたとも、言えるかもしれない）。色々なこととは、春見の過去など、それ関連の話題だ。

この頃には、敬介もだいたいこの事情は飲み込めていて、こういう質問に至るといふ訳である。

こちらも、雨はやみ、敬介は傘を閉じ、持っていたハンカチで涼貴の髪や顔をふき、着ていた上着を涼貴の肩にかけてあげた。

そして、話をするうちに、敬介の涼貴の呼び方が変わってきて、涼貴は違和感を覚えながらも、彼女はその過去により、人に構ってもらえることを無意識のうちに嬉しいと感じているので、別に嫌悪を感じたわけではなかったのだので、あえてその感情を無視して、敬介に答えを返した。

「今は、別に何とも思っていない。むしろ、養子に行った先の人達は優しいから、夏実には感謝すべきなのかもしれない」

「じゃあ、なんで無理矢理春見に思い出させるようなことしたの？」

敬介が、さらに問いを重ねる。

「……夏実は思い出さなければならぬ。夏実が忘れることは許されないんだ」

涼貴の重みを含んだ声に、敬介は敏感に反応した。

「どういうこと？」

「……それは、言えない。夏実が気づくべきだし、夏実から全てが明らかになるべきだ。また、必ずそうなる」

涼貴は視線を下に彷徨させたまま、そう言い、口を結んだ。

敬介は、これ以上は聞いても無駄だと悟り、質問を変えた。

「涼貴ちゃんは、なんで春見が夏実だつてわかったの？」

「なんとなくだ。ここに来たのも、なんとなくだった。よく、わからないんだ。たまにこういうことがある。まるで、誰かに導かれているような……」

敬介は黙って、涼貴を見ていた。

彼には、何か感じるところがあるのだろうか。

だが、敬介は、それとは別のことを口にした。

「よし、決めた」

敬介が、涼貴を見ながら呟いた。

涼貴は、敬介の言葉の意味がつかめず、困惑した顔で敬介を見つ

める。

敬介は、涼貴の両手を、自分の両手で包み込むように手を握り、  
にこやかにこう言った。

「俺の被写体になってくれないかな」

「は？」

この瞬間、涼貴の人生に一つの転機がきたのである。

海堂と夏実も、家路にて会話をしていた。

「ねえ、なんでケイはそんなにあたしのことを気にかけるの？」

夏実が、ふいにそう海堂に問う。

海堂はなんとなく照れたような、何を今更そんなことと言うような  
な笑みをうかべ、こう返事した。

「夏実、なんか忘れてない？俺は夏実が好きなんだよ。そんなの  
決まってるじゃないか」

目線は前を見たままだが、夏実は、その言葉をかみしめていた。  
温かくて、なんとも言えない、甘いような酸っぱいような複雑な  
味がした。

「そうか。みんな、あたしのことそう思ってくれてるのかな」

なんだか涙がでそうになり、ちよつと強がった口調になつてしま  
った。

海堂は、優しい声で返す。

「まあ、質とか程度とかは人それぞれだろうけど、みんなが夏実を  
好きで、必要としていると思うよ。……涼貴も、なんだかんだあつ  
たけど、ホントは夏実のことが大事なんだよ。今アイツがここにい  
るのがなよりの証拠だからね。……っていうか、なんで俺がアイ

ツのフォローしてんだよ。やっぱり今のなし。アイツはよくわからん」  
「……………」

海堂が、照れてそう言っているのがとてもよくわかるので、夏実は笑いをこらえるのが大変だった。

海堂は、なんとなく気まずくなり、話題を変えようと、こう言った。

「それよりさ、俺まだ夏実に大事なこと言ってもらってないんだけど」

海堂の言葉に、夏実は首を傾げる。

「何？」

「わかんないかな。俺、さっきなにげに告白してたんだけど」

夏実も、さすがにこれで察した。

「ああ……………」言わなくても、わかんない？」

照れ屋なのは、海堂だけではなかったようだ。

海堂は夏実の手をつかみ、自分の方へ引き寄せ、後ろから抱き締める格好になった。

「ずっと待ってたから、聞きたいんだ。夏実の声で、言葉で。頼むよ」

耳元で、海堂が切実にそう言った。

吐息が、柔らかに皮膚に触れる。

夏実は、体が熱くなるのを感じた。観念せざるをえないようだ。

夏実はため息を吐き、

「……………」大好きよ、ケイ」

と小さな声で言った。

海堂は、無言で夏実を強く抱き締めた。かなり嬉しいようだ。

夏実の胸にも、なんだか温かな、つい笑みをつかべてしまいそうな、そんな感情が宿っていた。  
もつすぐ、涼貴達の待つ、夏実の家に帰り着く。

そうして 彼らの新しい生活が、始まっていく。

BGM by Paula Cole " I DON'T  
WANT TO WAIT "  
RAN \*\*\*2005/2/1\*\*\*

「涼貴、なんかいい顔してないよ?」

春見が、空をさ迷う涼貴の視線を遮るように手を振る。

「涼貴ちゃん、なんか心配ごとでもあるの?」

恵津子が涼貴の机に手をつけてしゃがみ、彼女の顔を下から覗き込んだ。

「……いや、別に大したことはないんだが……」

涼貴は深くため息をついた。

「その顔は大したことはないって顔じゃあないよー」

「……ああ、もしかして敬介?」

春見の言葉に、涼貴は視線を二人からははずす。

これは肯定と受け取っていいだろう。

「ああ、敬介さんが涼貴ちゃんの写真撮らせてくれて頼んでるんだっけ?」

恵津子も、合点がいった、という風に言う。

「なんか敬介がごめんね。」

何で私らの周りにいる男共って、こうストーカーっぽいことする奴らばっかなんだろうね」

春見は涼貴と同じようにため息をついてそう言う。

「敬介は、私が今までに会ったことのないようなタイプの人間だから、どうしたらいいのかわからないんだ」

「ああ、適当に無視してサラッと流せばいいのよ。ゴキブリの生命力並に打たれ強いから」

「春見、あんたって男には手厳しいよね」

恵津子は苦笑いをうかべてそう言った。

「それにしても、涼貴ちゃんも敬介さんのこと呼び捨てなんだね」

恵津子は結構細かいところに気がつく。



涼貴は、なんとなく知られてはいけないことが知られたような気がして、動揺した。

「……あ、ああ。そう呼べと言われたから」

「なんか知らないけど、名前で呼ばせたがるのよね。まあ私は別に気にしないけど、涼貴は嫌ならちゃんと断りなさいよ」

表面ではクールに見える涼貴は、実は人一倍周りを気にする性格である。

春見は、人を気にしすぎて自分を押さえ込もうとする涼貴を知っているから、いつも彼女を気遣う。

夏実もそうだった。

子供ゆえのくだらない嫉妬で夏実を憎んでいたが、今はもうそんな気持ちはない。

全て知ってしまったから。

ちなみに春見は、自分の素性が知れたからとは言え、すぐ家に戻らなかった。

春見も、あまり戻りたくはなかったようだったから。

彼女にも、あまりあの家での良い思い出はなかったのだろう。

涼貴がさらにダメ押しで反対したから、春見の決意は固まったようだ。

だから、春見は今までどおり春見として学校に通っていた。

「そつえば、ケイは仕事復帰したんだろう？」

学校にもなかなか来れないみたいだし、最近会えてるのか？」

涼貴は話題を変えようと、そう話をふった。

途端に春見の顔は曇った。

涼貴は、その顔で答えがわかってしまい、思わず苦い顔をしてしまった。

「……ケイってやっぱ人気あるんだね。」

あんなに休んでた期間長くてもしかっかりファンがついてくるなん

てを」

「……………」

涼貴は何も言えなかった。

恵津子も春見と同様に顔を曇らせ、涼貴と同じように何も言えなかった。

慰めの言葉など、春見の無理して作っている苦しそうな笑顔を崩してしまっただけだ。

所詮他人のことなど、わかった気になっただけで、実際はわからないことばかりだ。

それなら、見て見ないフリをした方がいい。

余計なことをして、誰かを傷つけるぐらいなら。

夏実は私が守る。

涼貴は、その存在のために何にも負けるわけにはいかない理由があった。

RAN

\*\*\*2006/3/9\*\*\*

涼貴が春見の前に姿を現した直後、レイが涼貴の部屋を訪れた。と言っても、彼なら壁をすり抜けるだけで、不法侵入となんら変わりない。

そして、レイはただ黙って涼貴を見つめていた。

「何の用だ」

涼貴は負けじと睨み返す。

レイはため息を吐き、しょうがないな、というような表情をする。それがまた涼貴の神経を逆撫でする。

「何の用だ。いい加減にしないと……」

「どうすると言うのだ？」

涼貴の凄んだ声を気にとめた様子もなく、レイは彼女の言葉を遮った。

「汚らわしい呪われた娘が。今度は夏実に何をしようというのだ」「そういうお前達こそ、夏実に何をさせようとしてるのかわかっているのか」

レイは鼻先で嘲るように笑った。

「私達の家系は正当な由緒を持っているから今まで続いているのだ。私達は間違っただけだ」といえない

「では、なぜ私が生まれたんだ？」

レイの言葉が終わるか終わらないかのうちに、涼貴は自身を嘲るような笑みとともに、挑みかかるような響きで問う。

「……………」  
するとレイは、苦い顔をして押し黙った。

「私は、私の役目を果たすのみだ。

お前達と同じように。

どちらが正しいかは、時が決めること。

せいぜい頑張って生き残るためにお互いあがこうじゃないか」

涼貴は、のどを鳴らして笑った。

その笑い声は、彼女の部屋に響いて吸い込まれた。

この時に、彼女の負けられない理由は確定した。

己の存在のためにも。

学校が終わって、涼貴は校門から出るところだった。

「涼貴」

学校から一歩でも足を踏み出せば、最近では毎日のようにこの声が聞こえてくる。

「私はやらない」

涼貴は嫌々声のする方を向いた。

そこには、いつも通りの笑顔の敬介がいた。

「俺はあきらめきれないんだよ。

こんないい被写体見つけちゃったら、他なんて目に入らない。

もうコンクール締切近いんだ。

お願いします！ このとおーり！」

敬介は顔の前で両手を合わせて、お願い、と涼貴に頭を下げる。

「敬介、しつこい。涼貴嫌がつてんでしょ。

あんまりやりすぎると訴えるよ」

涼貴の後ろから春見が来て、冷たく言い放った。

「つてか待て春見、訴えられるよ、じゃなくて、訴えるなのか」

「当たり前よ。涼貴の敵は私の敵よ」

「敵?! 俺はもはや敵扱い!?!」

春見の冷徹な言葉に動揺した敬介は涼貴を見た。明らかに助けを求めている視線だ。

困ったな……。

生まれに複雑な事情を持つ涼貴は、実の両親や親類からの愛情に恵まれなかったため、人に話しかけられることだけでも喜びを感じる。

だから敬介の誘いは嬉しいのだ。

だが、今の自分がモデルなどとしていいのか、という不安があり、その誘いを受けることに迷いがあった。

しかし、敬介の切羽詰まった様子を見ると、断ることができなかつた。

「……わかった、敬介。その話、受けよう」

涼貴はついに根負けした。

その瞬間、敬介の表情が喜びのために明るくなったことは言うまでもない。

R  
A  
N

\*  
\*  
\*  
2  
0  
0  
6  
/  
3  
/  
9  
\*  
\*  
\*

土曜日の穏やかな昼下がりに、涼貴は敬介と共に川辺にいた。緑深い草が生い茂り風になびく様子は、夏に近づきつつあることをうかがわせる。

「とりあえず、どうすればいいんだ？」

まず涼貴は一番気になることを聞いた。

しかし敬介は、涼貴の言葉にきよとんとした顔になった。

「何が？」

その敬介の反応に、涼貴も不安そうな顔になった。

「何って……私は今までモデルとかの経験がない素人なんだぞ。

どうしてたらいいのかわからないんだ」

敬介はその言葉を受けて、なーんだ、と言って笑みを浮かべた。

涼貴は不審そうに眉根を寄せる。

「何も気にしないで普段どおりでいいんだよ。

このすがすがしい昼下がりに、川辺には涼しい風が吹く。

ああ気持ちいいな」と歩いてみる。

その一瞬一瞬にシャッターチャンスがあるんだ。

俺はそれを見つけて撮る。

だから涼貴は気にしないでそのままできていいんだよ」

涼貴は、敬介の言うことは理解した。

だが、やはりそれでも

「それでも、私は特に目的があつてここにいるわけじゃない。手持ち無沙汰なのは落ち着かない」

敬介は、うーん、と顎に手を添えて考える。  
そして、何かを思いついたというように、パチンと指を鳴らした。  
短い間にコロコロ変わるその様子を、涼貴はおもしろいと思いな  
がら見ていた。

「じゃあ、今日は俺と一日デートって考えてよ」

「デート……?」

涼貴は、聞き慣れない単語に首をかしげた。

「うん、そうだ、それがいい」

敬介は一人でうなずきながら勝手に納得している。

「とりあえず、涼貴はそのまま歩いていってよ」

納得がいかぬまま、とりあえず涼貴は敬介に従って歩きだした。

「どーん！」

歩きだして数歩で、突然後ろから衝撃がきて、涼貴は土手を転が  
っていった。

止まった所で、勢い良く起き上がり、辺りを見回す。

「ごろごろごろー」

すると、ちょうど隣にくるように、涼貴を突き倒した本人が楽し  
げに土手を転がってきた。

「敬介！」

涼貴は何がなんだかわからず、声をあげる。

「はい！」

転がってきたかと思ったら、どこから出したのか、カメラを持ち、  
写真を撮る。



「うん、いい写真が撮れた！」

敬介は草だらけになったその姿で、とても嬉しそうに言った。

涼貴はその姿を見て、なんだか怒るのも馬鹿馬鹿しくなり、ふと自分についた草を取った。

むせ返るほどの青く濃く深い匂い。

全てが体に染み込み、落ち着かなかった心がだんだん落ち着いてくる。

涼貴は、春見の時とはまた違う、穏やかな気持ちを感じた。

そして、自然と笑みがこぼれ、なんだか楽しくなってきた、小さく、やがて大きく、笑い声を出した。

今度は、敬介は何も言わずにシャツターをきった。

そうして、ひとしきり笑った後の涼貴に、敬介は声をかけた。

「おもしろい？」

「……ああ」

涼貴はふっきれたような明るい笑顔で答えた。

敬介は、それを眩しそうに目を細めて見た。

「よかった。それじゃあ、まだ日は明るいから、デートの続きをしようか」

敬介は草を払いながら立ち上がり、涼貴に手を差し出す。

涼貴は笑みを浮かべたまま、敬介の手を取り立ち上がった。

「敬介」

立ち上がったと同時に、涼貴は敬介の頭にひっかかっていた草をつまむ。

「草がまだついてた」

涼貴は何もないように言った。

実際、草を取っただけで他に何もないのだが、敬介は顔を赤くしていた。

「あ、ありがと。……そ、それじゃあ行こうか！」

敬介はその顔を隠すように、涼貴とは反対方向に向いて歩きだした。

涼貴もそれに黙ってついていく。

一度取った手は、自然と離れていた。

敬介と涼貴の二人は、人通りの多い、店が立ち並ぶ通りを歩いていった。

「気になってたんだけど、涼貴はどういうことに興味があるのかな  
並ぶ店を見ながら、敬介はそう聞く。

「……そう言われると何と言っていいかわからないな」

涼貴は敬介とは逆の側の店を見ながら、悩むようになつた。

「涼貴はこういう服似合うと思うんだよな。ほら」

敬介は涼貴の手を引き、見つけた店に引き寄せる。

「……これが……」

敬介が示したのは、白いカーディガンと淡い空色の裾がフレアになつているワンピースだった。

明らかに涼貴が好んで着るものとは違っていた。

「こつというのは春見が着るのがいい」

涼貴の言葉に、敬介はとたんに苦い顔になつた。

「春見ー？ 春見には似合わないな、この色は。あいつ背低いし。

気に入らないなら、こつちはどう？」

敬介は隣の別の店に涼貴を引っ張っていく。

そして見せたのは、涼貴の好む黒だったが、短めなスカートの方は段になっており、段ごとにも、袖にもレースで装飾がされているものだった。

涼貴はしばらく言うべき言葉が見つからず、絶句してしまった。

「……お前の趣味がわからないよ」

やっと出した言葉がこれだった。

「気に入らないか！」

別に俺の趣味じゃなくて、ただ似合うんじゃないかと思うものを選んでるんだけどな！。

涼貴は色々な服を着るべきだよ。

背も高いし肌も白いし顔も小さいし細いから、何でも着れるし似合うよ」

涼貴は困惑していた。

今までこういう扱いを受けてきたことがないからだ。

しかし思い返すと、今の引き取ってくれた両親も、始めの頃は色々な服を着せようとしていた。

しかし涼貴がそれをあまり好まなかったため、なくなっていったのだ。

もしかしたら、両親は敬介と似たようなことを思っていたのかも知れない、涼貴はそう感じていた。

「こういう服とか着た方がいいんだろうか……？」

涼貴の小さな呟きを敬介は聞き逃さなかった。

聞いたとたんに嬉しそうに顔を輝かせた。

「そうそう！ もったいないって！」

「だが、私はこういうことはよくわからないんだ。教えてもらえるか？」

「もちろんだよ！ そういうの詳しい知り合いもいるから、色々試してみるといいよ」

敬介は嬉しそうに話し、それを聞く涼貴も嬉々としていた。

そうしているうちに、日は傾いていき、空が赤く染まる頃となった。

賑やかな通りを抜けて、二人は静かな住宅街を歩いていた。

「涼貴」

「ん？」

敬介の呼ぶ声に、相変わらず前を歩かせられていた涼貴が後ろを振り向く。

立ち止まって振り向くと、シャッターを切る音がした。

敬介がカメラを構えてそこに立っていた。

「これで今日の撮り納め」

カメラから顔はずした敬介の顔はすがすがしい笑顔だった。

「ちゃんと写真は撮れたのか？」

「ああ、おかげでいい写真が撮れたよ」

嬉しそうな敬介の笑顔に、涼貴もつられて淡く笑みがうかんだ。

「そうか。ならよかった。それなら最後に、私の頼みを聞いてくれるか？」

「何？」

涼貴は少しためらいながら口を開く。

「またさっきの川の所に一緒に行ってくれるか？」

敬介は一瞬目をしばたたかせ、すぐに同じ笑顔に戻る。

「全然かまわないよ。」

今日一日付き合ってもらったんだから。

もっとお願いはないの？」

「いや、今のところはない」

涼貴はやや困惑気味に返事をした。

とりあえず、二人は並んで歩きだした。

「今日は楽しかった。だから、付き合わされたなんて思ってない。むしろこちらからも礼を言いたい。ありがとう」

涼貴は敬介に向かってそう言った。

彼女はいつだって何か言う時は人に向かって言う。

敬介は前を向いたまま言った。

「それはよかった。じゃあまた頼んでもいいかな？」

「それとこれとは話が別だ」

涼貴は声の調子を落として切るように言った。

敬介は苦笑をうかべる。

「そうですかー。でも俺はあきらめないから」

最後は力強く言い切られたため、涼貴は何も言わなかった。

RAN

\*\*\*2006/3/9\*\*\*

涼貴と敬介は川辺に着き、土手に並んで座った。

「今日はあんまり黒い羽見えなくてよかったよ」

敬介がぼつりと言った。

なにげなく言われ、涼貴は聞き逃しそうになった。

だが聞いてから言葉の意味を理解し、敬介の方を向いて身構えた。

「どうして……お前は見えるのか?!」

涼貴は敬介の前に回り込み、肩をつかみ問い詰める。

敬介はいつもの明るい笑顔ではなく、ほのかに動く柔らかな笑顔で、右肩にある涼貴の手にそっと触れた。

「怖がらないで」

涼貴が大きく震えた後、敬介の肩に置いた彼女の手の力が抜けた。

視線は合ったまま絡まる。

しかし、涼貴の方から視線をそらした。

敬介は残念そうに小さくため息をつく。

「春見についてるレイのことも、春見が普通とは違う能力を持つてることも知ってる。

俺にもよくわからないけど、昔からそういうのを感じとることができるんだ」

敬介が静かに語る声を、涼貴は聞く。

何かを考えているのか、視線がたまに動く。

敬介は触れていた涼貴の手を離す。

涼貴がそれに気づいて敬介を見ると、彼の悲しみの色を帯びた目

と合った。

「今は、黒い翼が見える」

「……………」  
敬介の低く、気遣いながらも悲しみの響きを含む声を聞いて、涼貴は唇を噛んだ。

「……まだ、本当のことは聞かせてもらえない？」

先程の声とは違ってかわって、明るい調子で敬介は言う。

「まだ駄目だ。時ではない」

この答えはすぐに、強く返ってきた。

「時がきたら、わかるの？」

涼貴は静かに一つうなづく。

「たぶん、嫌でもわかる」

「そうか」

涼貴は暗い面持ちのままだが、敬介はいつもの笑顔になった。

「それならいい。とりあえず、俺はその時に応じて協力していくよ」

「……………」

涼貴も自然と笑顔が出た。

「……………」

涼貴が何か思いついたように切り出す。

「ん？」

「……………」

涼貴の言葉に、一瞬時間が止まった。

「……………」

敬介はこらえきれずに笑いだした。

涼貴は何かおかしいことを言ったのだろうかど、困惑の表情になる。

「俺が、春見を好きって、何で……ひー、腹が痛い……」  
敬介は腹を抱えて大笑いしていた。

涼貴は敬介の向かい側で、いたたまれないような表情をしながらお座りしていた。

「……なんとなく見ててそう感じたんだが、違うなら悪かった……」  
「気まずそうに言う涼貴に対し、敬介はまだ笑いの余韻を残しつつも、手を振って何かを言おうとする。

「いや、悪い、違うんだ。」

「……確かに、俺は昔春見が好きだったよ。」

でも、それは昔の話だ。今はもうそういうのではないよ」

「なぜ笑う？」

涼貴の問いに、敬介は一瞬息をつめる。

だがすぐに笑みをうかべて話しだす。

「……俺の中では過去のことになってたからだよ。」

昔話をする人とは自然と笑いだす」

「それが楽しい思い出ならな」

「どうしようもなかった時も、だよ」

「……ケイか？」

涼貴の重く響く声に、敬介は鼻先で息をつく。

「……なんとなくそういう奴がいるような気配もあった。」

断ち切れなさそうな感じも。」

どうにかしようなんて気さえ起こさせないぐらいに強いものを感じた。

俺は拒否されてた。入ってくるなと」

「……本当に、あの二人は何なのか……」

涼貴は笑みをうかべながらも小さく呟く。

その言葉の端には悔しそうな響きがあり、少し眉を寄せていた。



敬介は、その言葉を聞かなかつたように話し続ける。

「だから俺は何も言わない。涼貴も、春見に余計なこと言っんじゃないぞ」

敬介は唇の前に人差し指をあて、軽い調子で言う。

その様子に、涼貴は口の端を持ち上げるだけの笑みをうかべる。

「言われたくないことがあるのはお互い様だ。言う気はないよ」

涼貴が言った時、二人の目が合った。

合つと、二人は笑みをうかべた。

「なんか俺らつて気が合つと思わない？」

「そうかもな」

「だからさ、一緒に仕事とかしたらうまくいくと思うんだけど」

懲りずに、しかも笑顔で誘いをかける敬介を、涼貴は軽く睨みつける。

だがすぐに、あきらめたような笑みをうかべる。

「こちらも、できる限り協力するよ」

「よし！ 交渉成立！」

敬介は片手の拳を握り、ガッツポーズを取って喜んだ。

「じゃあさ、さっそく俺の先生に会ってみないか。」

詳しいことなら、そろそろ暗くなってきたから俺の家でも……」

一気にまくしたてる敬介の顔の前に涼貴が手をかざして言葉を止めた。

「落ち着け。私はやるとは言ってない」

苦笑をうかべつつ、涼貴は頭をおさえていた。

敬介もさすがに苦笑いをうかべた。

「まあでもさ、その気になつたらやるのは早い方がいいし。」

ちよつと現場とか見に来ない？」

今度は多少弱気に誘う。

涼貴は頭を抱えたままの姿勢で、視線だけを敬介に向ける。少し意地悪そうな笑みをうかべて。

敬介は視線を少し横にそらした。

「まあ、考えておこう」

「ああ、頼むよ」

敬介はほつとしたような笑顔になり、涼貴も顔をあげて、顔をほころばせた。

「じゃあ、本当にそろそろ暗くなってきたから帰ろうか」

敬介がそう言って立ち上がり、涼貴に手を差し出す。

涼貴はその手を取り、草をはらいながら立ち上がった。

そして、二人は並んで歩きだした。

RAN

\*\*\*2006/3/9\*\*\*

それから三カ月後。

敬介は涼貴の部屋を訪れていた。

涼貴の部屋のドアを控えめに叩く。

「涼貴ならいないわよ」

春見が隣の自分の部屋から顔を出す。

「んー、そうなの？」

いつ帰ってくるのか聞いてるか？ 用事があるんだけど」

「用事って何？」

「これ」

春見が部屋から出ながら、不審げに眉を寄せて聞くと、敬介は大きな封筒を取り出して掲げて見せた。

春見は、何かわからず、封筒を見て考えたが、すぐにわかったように目を見開く。

そしてゆっくりと敬介を見る。

「まさか……」

敬介は得意げに笑ってみせた。

「ま、詳しいことは涼貴が戻ってから……」

「何してるんだ？」

背後からいきなり声が聞こえ、敬介は大きく体を震わせる。

「涼貴」

春見が敬介の横から顔を出し、声の主を確認する。

敬介はそれを聞いて、嬉しそうに後ろを振り向き、買い物袋をさ

げた彼女を確認した。

「ああ、涼貴ちょうどよかった！ 話したいことがあるんだよ」

「そうなのか。それならば部屋にあがってくれ。春見もどうだ？」

涼貴は部屋の鍵を開ける。

「もちろんですよ。敬介と部屋で二人つきりになんかしらないわ」

「何それ。俺が涼貴に何かすると思ってるわけ？」

春見の言葉に、敬介はむっとした顔で春見を見る。

「思ってるわけ」

全く表情を変えずに言う春見の言葉に、敬介はあきらめを含んだ笑みをうかべる。

「ああ、そう言うと思ってたよ」

「ほら、さっさと中に入れ」

そんな二人のやりとりを涼貴は笑顔で見ながら、ドアを開けて二人を中へ入れた。

「聞いてくれ！ 俺の写真が入賞したんだよ！」

部屋に入って扉が閉まったとたん、たまっていたものを吐き出すように敬介は話した。

「先生が約束してくれたんだよ！

これ入賞したらこれで下つ端雑用から、先生の現場を直接手伝えるようにしてくれるって！」

明日の撮影にさっそく入らせてもらうんだ！」

「そうか、それはよかったな」

嬉々として話す敬介を、涼貴は笑顔で聞く。

春見は無表情のまま二人の顔を交互に見ていた。

「これも涼貴のおかげだよ」

敬介は涼貴の手を取りながらそう言う。

涼貴はやや戸惑った笑顔で答えていた。

「どんな写真かは見せてもらえないの？」

春見は冷めた調子で言う。

「あ、そうだった。やっぱり写真見たいよね？」

敬介は涼貴から離れ、脇にあつた鞆を漁りながら涼貴に問う。

「ああ、見せてもらえるのなら見たいな」

敬介から解放され、ほっとしたように涼貴はうなずいた。

「これが賞をもらったヤツだよ。」

他に撮ったのも焼いたから、欲しいのがあつたらあげるよ」

敬介は写真を何枚かず置き、テーブルに広げる。

「こんなに撮ったんだな」

涼貴は広げられた写真を手にとって眺めながら、少し驚いたように言う。

「うん。やっぱりたくさん撮らないとね。気づかせないのもテクニツクなのだよ」

「一歩間違つと犯罪よね。ねえ、私ももらつていい？」

スパイクをきめるがごとく、敬介の言葉にすかさず春見がツッコミを入れる。

しかし敬介は、気にすることなく、春見の質問に答える。

「なんで春見にやらなきゃなんないんだよ」

「私も欲しいのよ。」

やっぱり涼貴は美人だし、一応あなたの写真の腕は認めてんのよ、これでも。

撮る方も撮られる方もいいなら、写真もよくなるでしょうよ」  
「誉められて悪い気がする人間はいない。」

「……しょうがないな。何枚かならいよ」

敬介は渋々という感じだが、おだてにのつたのは見え見えであった。

「どれにしようかな」

春見は楽しそうに写真を物色し始めた。

涼貴はそのやりとりを横に聞き、苦笑いを浮かべながら自分の写真を眺めていた。

なんだか気恥ずかしかったが、その中に目をひくものがあり、手にとって見た。

その写真は、土手で敬介に突き飛ばされて転がった時のものよ  
うだ。

草まみれで笑っている自分がいた。

なんだか情けない姿だと思いつつも、自分はこんな顔をして笑っていたのか、と見入る。

良い顔してるじゃないか、と人事のように見ていた。

「それ気に入った？」

敬介はにこにこしながら聞いてきた。

涼貴は、思わず気持ちが顔に出ていることに気づき、恥ずかしくな  
った。

「……あ、ああ。なんか自分はこんな顔してたんだなと思って」

少し声がうわずっているのも、恥ずかしさを助長した。

「どの写真かな」

敬介は向かいの涼貴が持つ写真に手を伸ばし、取る。

写真を見た敬介は、溶けそうなくらいに嬉しそうな笑顔になった。

「そうか、この写真か……。あのね、これが入賞した写真なんだよ」

「へえ！ 見せてよ！」

そういえば、どの写真が入ったか聞いてなかったわね」  
春見が敬介の手から写真を取って眺めた。

「うん。なんとなく、わかるかな」と思ってたけど、  
本当にわかるなんて思わなかったけど。

「やっぱり俺と涼貴は運命の糸で結ばれてるのかなー」

「偶然よ。いい写真ってのはおのずとわかるものよ。」

涼貴にはセンスがあるからね」

顎に手をのせて、夢見る乙女のように言う敬介の言葉を春見はピ  
シヤリとはねのけた。

しかし、敬介は気にせず話を続ける。

「それよかつたらあげるよ。何か他にはない？」

敬介の問いに、涼貴はテーブルを一度見回して、首を横に振った。

「いや、あとはいいよ。」

自分の写真を見るのはなんだか変な気分だしな。

これだけでもあればありがたい」

「涼貴がもらわないなら、私がもらったっていいでしょ」

涼貴の横で、春見が広げられた写真をがさがさと取り始める。

敬介はそんな春見に呆れも含んだ苦笑いをうかべていた。

「ああ、いいよ。ただし一種類一枚ずつだからな」

「はいはい」

春見は言われたとおり、写真を一枚ずつ取り出した。

「こういうのは後から見ても楽しいもんなのよ」

春見は楽しそうな笑顔で、写真をまとめていく。

「ってか、その見せる役目は俺の役目だったの」

「まあ、そういう細かいことは気にしないの」

さらりと流す春見の言葉に、敬介は呆れ顔を見せつつ、話題を変  
えた。

「……ところでさ、先生にこの写真見せたら、先生が涼貴のこと気

に入っちゃったみたいなんだ。

よければ明日の撮影に来てみないかって話なんだけど、どうかな？  
日曜日だから学校はないだろうし」

「……………」

敬介の言葉に、涼貴は少し考え込む。

人情沙汰に弱いのは、自分でもわかっていた。

行ってしまつたら、今回の敬介のことのように何かまたあるんじゃないだろうか。

自分はそれに対処できるのか。

涼貴は頭の中を様々な考えがよぎる。

春見は、黙って涼貴を見ていた。

しばらくの沈黙の後、涼貴はゆっくりと口を開いた。

「……………明日は特に用事もないから……………行ってみようかな」

敬介の顔は明るくなり、春見はむすっとした顔で涼貴の言葉を受けた。

「よかった！ そしたら、明日迎えに来るよ。」

朝八時ぐらいだけど大丈夫かな？」

「ああ、問題ない。それまでに出れるようにしておく」

「本当によかった！。そしたら、明日よろしく頼むね。」

俺は明日の準備があるから、この辺で失礼するよ」

敬介はさつさと余った写真を片付け、鞆におさめると立ち上がる。

「そうか、今日はわざわざありがとう」

涼貴は敬介に次いで立ち上がる。

「いやいや、涼貴のためなら火の中水の中さー」

敬介はドアのノブに手をのぼし、軽い調子でそう言いながらドアを開ける。

そして、逆の手を振りながら外へ出ていった。



後に残されたのは涼貴と春見。  
涼貴は静かにさつきまで座っていた位置に戻る。

「……………行くの」

春見がつぶやくように問う。

「……………ああ」

春見は大きく一つため息を吐く。

「ケイだけじゃなくて、涼貴も別世界に行っちゃうのね」

「私はまだそういう仕事を受けるとは……………」

涼貴が立ち上がり気味に春見に近寄ろうとすると、春見は片手を涼貴の前にかざして制する。

「たぶん、涼貴はそっちに行く。そんな気がする。」

「だいたいね、その美貌を見せないなんてもつたいないのよ！」

涼貴全然しゃれっ気ないし。

「どんどん飾り立てられればいいのよ。うん、素敵！」

春見はどんどん自分の世界に入っていく。

涼貴は、そんな春見に声をかけることができず、ただ見ていることしかできない。

「それに、なんか涼貴、敬介といるといい顔してる」

「は？」

「思わぬ言葉に、涼貴はとぼけた声を出してしまった。」

「春見は楽しそうな笑顔でそんな涼貴を見ている。」

「だから、いい影響かなとね」

涼貴はうーんと少し考えてから、口の端に笑みをうかべてぼつりぼつりと話した。

「……………確かに、敬介のおかげで私は変われそうな気がするよ」

「でも敬介はバカそうだけど、人にあんまり本心見せないヤツだから」

ら気をつけてね」

春見は人差し指をたて、にやりと意味ありげな笑みをうかべて言う。

「ああ、それはなんとなく気づいているよ」

涼貴も春見と同じような笑みをうかべる。

どちらからともなく、こらえきれずに大声で笑いだした。

しばらくその声が止むことはなかった。

みんなのおかげで私は変わる。

涼貴は今までに感じたことのない気持ちを感じていた。

それは心地よいぬくもりで涼貴を満たす。

これがいつまでも続くことを彼女は切に願っていた。

RAN

\*\*\*2006/3/9\*\*\*

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5645u/>

---

Best Friends

2011年8月17日03時33分発行